

四国中国紀伊の旅 2022



2022年11月

旅のチカラ研究所 植木圭二

四国、しまなみ海道、山陰、紀伊半島を旅してきた。今回の旅は大きく3つのスタイルをとっており、1人旅、2人旅、そして5~6人の旅、そして一貫して乗り物とグルメにこだわった旅になった。

第一章 徳島県

■豪華な高速夜行バス

旅の初日は1人旅で始まる。今、私は夜の新宿の巨大なバスターミナル「バスタ新宿」にいる。高速バス、それも夜行の高速バスは運賃が安く、眠っている間に目的地まで行けるので最近は人気がある。本日は日曜日の夜ということもあって週末を首都圏で過ごした若者たちでごった返している。私もその若者たちに交じってバスを待っているが、これから私が乗るバス「マイ・フローラ」は高級路線を狙った夜行バスで決して安くはない。

そのマイ・フローラがバス乗り場に入って来る。運転手に予約証を見せて乗り込むのだが、入口で靴を脱いで乗ってくれと言われる。靴は運転手が預かって靴箱に保管している。それにしても土足禁止のバスとは、私としては初めての経験だ。バスの床は厚みのある高級感ある絨毯が敷かれており、スリッパも用意されている。

一般的な観光バスは通路を挟んで2人掛けのシートが2つある1列4人の配置だが、最近人気の夜行高速バスでは1列に3つの独立シートのものもある。しかしマイ・フローラは中央通路を挟んで1人ずつ、つまり1列に2人という構成になっている。そしてそのシートはリクライニングして、その角度はほぼフラットに近い。

シートの前と通路側が囲われていて、まるで部屋のようにになっている。部屋の中にはテレビ、読書灯が装備されて、ブランケットもある。その部屋は全部で12部屋、つまり乗車定員は12人で、最後尾には豪華な洗面兼トイレの広い個室がある。前面は一面鏡張りで綺麗な花が活けられている。もちろんトイレはウォッシュレット付きで、男性も座って用をたせと書かれている。

私はその注意書きに気付かずに、いつものように立って用をたしたら、なかなか狙いが定まらない。やはりバスなので揺れる。決して乗り心地は悪くはないが、おそらく普通の観光バスの内装を変えただけなので致し方ないだろう。



【マイ・フローラの通路】



【マイ・フローラの洗面所兼トイレ】

バスなので目線が高く、ベッドに寝転んだ感じで車窓を眺めるのは初めての経験で面白い。隣に並んだトラックの運転手とアイコンタクトをするのもまた楽しい。

知らず知らずに眠ってしまい、気が付いたら夜が明けており、徳島県の阿南市に到着する。快適なので熟睡していたようだ。マイ・フローラは夜行高速バスの新たな可能性を感じさせてくれた。

■すたれた街

私はバスを降りて JR 阿南駅で相棒と待ち合わせをしている。その相棒とは先月も一緒に東北旅行に行ったメンバーのひとりのヒデさん、地球一周の船旅で知り合った大阪在住の旅友だ。

彼と落ち合い、JR 牟岐（むぎ）線に乗り込む。牟岐線の終点の阿波南海駅が、旅の次の目的地になっており、2人の列車旅が始まる。

列車の乗客のほとんどは中高生だが、10分もしないうちにそのほとんどが降りて車内はガラガラになり、さらにもう10分したら私たち2人しか乗っていない。中高生たちが通学だけに使う典型的な過疎地のローカル鉄道だが、何と極端なのだろうか。

列車は牟岐駅に着く。ここから先も JR 牟岐線の線路は続いているが、あまりにも列車の乗り継ぎが悪い。

時間が相当あるので、周辺を散策しようと駅前の看板を見ると正観寺という寺が近くにある。行ってみると、実に大きな寺だ。まさかこんなところにこんな寺があるとは予想もしておらず、私もヒデさんも驚くばかりだ。人は予想をしていないことや予想を超えたことに出会うと衝撃を受け感動をすると言う私の持論は正しかったようだ。

境内で人と会うことはなかった。静かに鎮座しているかのような寺だった。

駅に戻り時刻表を見ると、次の列車までたっぷり時間がある。しかしこの事態は想定内で、鉄道と並行して路線バスがあるので、これを利用しようと考えていた。

牟岐駅近くにある路線バスの営業所からそのバスが出るので、そこでバスを待っていると40才前後の男性と人と目が合って、どちらからともなく挨拶して話しが始まる。彼は牟岐町の出身ではあるが、大学も就職も別の都市で過ごし、最近になってUターン移住してきたという。彼は「牟岐はすたれた。産業もなく、市町村合併さえも魅力がないので声がかからない。全くもって救いようがない。」としみじみと言っている。

私が「でも DMV があるから観光客も来るようになったでしょう」と切り出すと、すかさず彼は「DMV は早くやめたほうがいい、この地域は鉄道に並行して国道があるので今さら鉄道でも DMV でもないよ」と一蹴される。私はそんなものなのかなと軽く受け流した。

バスに乗り阿波海南駅近くのバス停で降りる。確かに鉄道は不要かもしれない。

■DMV

旅の次の目的は DMV (Dual Mode Vehicle) に乗ることだ。DMV とは線路と道路の両方を走ることができる世界初の乗り物で、昨年から徳島県の阿佐海岸鉄道で運行を開始した。

DMV は過疎鉄道の救済のために JR 北海道が基本システムを開発したが、経営難から実用化を断念した。それを徳島県が受け継ぎ、関係自治体と事業費 16 億円を投じて実用化した。阿佐海岸鉄道は鉄道復活の切り札として DMV を導入し、話題性もあって注目を浴びている。

阿波海南駅で約 1 時間待っていると、道路から DMV がゆっくり入ってきて停車する。一見する限り普通のボンネットバスだが、次の瞬間、前輪のみ鉄の車輪を下げて鉄道モードにチェンジする。その切り替わり時間は 30 秒位だろうか。

DMV はバスがベースの車体なのでバスモードの時は通常のバスのように見えるが、鉄道モードになると前輪のみ鉄の車輪が出て、後輪はゴムタイヤのまま線路を蹴って駆動する。従って鉄道モードでは、やや前部が高い姿勢で線路を進んでいく。



【DMV 鉄道モード】

乗車すると、数人の乗客が座っている。満席を予想して予約していたが、やや落胆する。

乗客が乗ってくると運転手は予約客かそうでないかを聞いて、携帯端末のタッチパネルを叩いて座る座席を指示する。運賃の回収含め運転以外の全ての雑務をこなしている。別にハードワークには見えないが、ここまで運転手にさせるのかという感じがする。何しろ DMV の運転手は、鉄道運転の資格だけでなく、バスの運転に大型二種免許が必要になる。

席に座るとビデオ映像が流れて、DMV の説明、モードチェンジの様子を解説してくれる。走り始めると、ガタンゴトンという線路の継ぎ目の音が意外にうるさい。時速約 57km をほとんど維持しており、一般的な普通列車は 100km 前後で走るから、かなり遅い。

それにしてもバスが線路を走っているのは、やはり変な感じがする。



【DMV の運転席から見た鉄道駅ホーム】



【DMV の車内】

運転席付近でずっと動画を撮っている人がいる。聞くと「どこでもローカル鉄道」という会社の人で、阿佐海岸鉄道を取材に来たという。乗客目線の動画を撮って、家に居ながらにしてローカル鉄道に乗った気分を味わえるというコンテンツを公開しているという。

彼から色々なこと聞き出す。今まで取材した中で最もお勧めのローカル線を聞くと、熊本県の「くま川鉄道」だと言う。私がまだ行ったことがない鉄道だ。

線路の終点は高知県になっている。名前が阿佐海岸なので土佐（高知県）を意識して室戸岬あるいはその先までを視野に入れた鉄道なのだろう。

そして道路を走るのでバスモードにチェンジをする。またビデオが流れ、太鼓の音と共に最後は“フィニッシュ”と言う言葉で終わりになり、そこで車内では笑いが起こる。

バスモードで再び徳島県側の終点到着し、35 分間の短い DMV の旅が終わる。

それにしても DMV はもう少し営業距離が延びないのだろうか。土日祝日は室戸岬を少し回って「海の駅むろと」まで行くが、それでも鉄道の駅まで行かない。高知県の奈半利町まで行けば、土佐くろしお鉄道の「ごめん・なはり線」がある。そこまで繋げれば観光用の移動手段としてもっと利用価値があるような気がする。

せっかく世界発の乗り物を開発したのだから、次はどのように活かせるかという路線の充実、その使い方へ移っている。

終点には「穴喰温泉リビエラ」というホテルがあり、道の駅が併設されている。ここで立ち寄り湯と昼食をするのだが、このホテルには2年前の四国お遍路の旅で泊まったことがある。pH8.6のアルカリ泉で、肌がスベスベしている。

昼食はホテルのレストランで「鰹酒盗井」を注文する。本場だけあって鰹はもちろん美味しいが、酒盗も適度に塩辛くてなかなかいける。酒がすすむので盗んでまで酒が飲みたくなるから“酒盗”とはよく言ったもので、私たちのビールもすすんでいる。



【鰹酒盗井】

再びDMVに乗る。今度は満員御礼になっており、私もヒデさんも少し安心する。

■出羽島

再び牟岐駅に戻ってくる。牟岐の沖合には出羽島（てばじま）という小さな島があり、本日は出羽島に泊まることにしている。

牟岐港から連絡船に乗り約15分で渡ることができる。連絡船の定員は70人とは書いてあるが、乗客は私たち以外に3人乗っているだけだ。1人は島の住人らしいおばあさん、あとの2人は若者で釣り客らしい。おそらく近くに住んでいる若者で、釣りの装備品が半端でないほど凄い。本日は夜釣りをするようなことを船長と話している。

出羽島以外にもたくさん島の島や岩礁が見える。おそらく海底の地形も複雑になっているのだろう。この地形によって魚が多く、釣り客が訪れるのだろう。

船は結構揺れる。ここは太平洋、しかも外海になるので当たり前かもしれない。15分なので酔いにはならなかったが、もっと長く乗っていたら危なかった。

出羽島に到着すると民宿の主人が迎えに来てくれている。彼とはここ1カ月くらいの間に電話で何回か話をしてはいるが、それでも初対面なので自己紹介をして同行のヒデさんを紹介する。彼の名前は西さん、スラっとした体格で気さくな人柄がうかがえる。

民宿まで約10分の道のりを歩いていると、彼は行き交う島民たちと親しそうに声を掛けている。私が「顔が広いのですね」と言うと、彼は「島民は48人しかいませんので皆親戚みたいなものですよ」と答えてくれる。ヒデさんが「西さんは移住してきたのですか？」と聞く。そう質問した理由は、実はバスを待っている時に聞いた話では出羽島は移住者でもっているような島で、移住者がいなかったとつくと無人島になっていると聞いたからだ。彼は「24年前に37才の時に移住して来ました」と答える。すかさずヒデさんが「61才ですか、もっとずっと若いと思いましたよ」とお世辞を交えている。私は年相応に見ていたが、ヒデさんの人柄か話術の巧みさか、西さんも悪い気はしていない様子だ。

民宿に着くと、入口には「出羽島ゲストハウス『シャンティシャンティ』」と書かれた看板が架かっている。

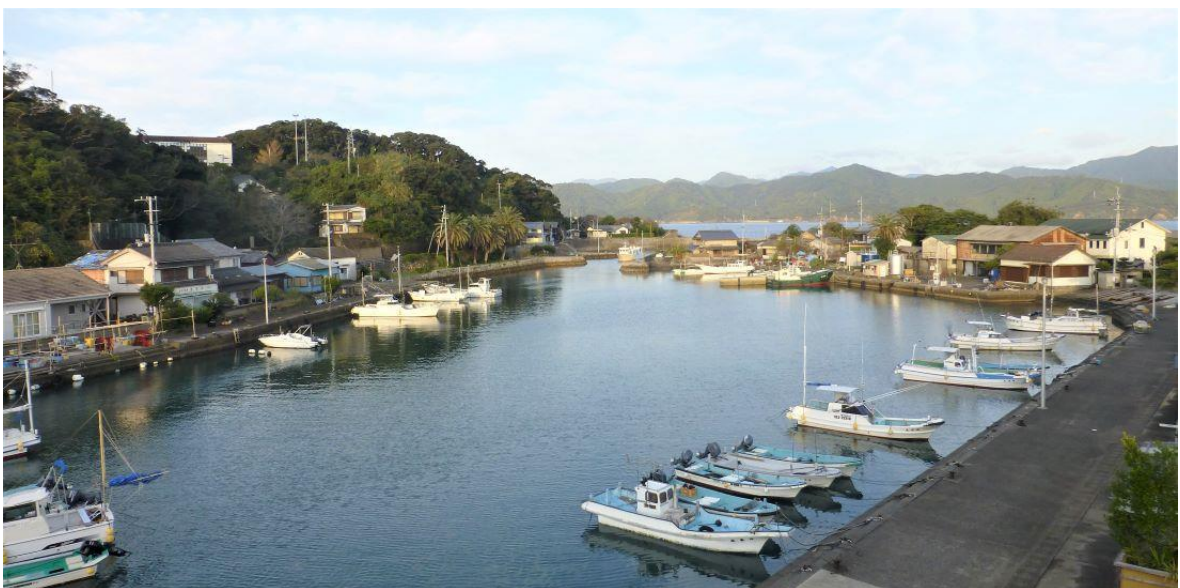
西さんから宿の設備について説明を受ける。私が「今日、私たち2人だけですか？」聞くと、彼は「そうです、1日1組しか取らないので」と答える。この宿は2階建ての古民家で、1階部分を客室としている。10畳くらいの部屋と、襖で仕切られたとやや狭い部屋の2部屋があるだけなのでそうしているのだろう。トイレや風呂は別棟になるが、いかにも手作り感たっぷりで、西さんが廃材を利用して作ったらしい。大工さんはもちろん建築資材も簡単に手に入らないので自分でできることは何でもするということなのだろう。

夕食まで時間があるので島内探検に出かける。出羽島は米粒のような細長い形をしており、長い方は約900m、短い方は約500mなので一周しても1時間もかからない。島の北側、つまり牟岐に街に近い方に港があり、南側は山になっているから人家は北側に集中している。港は楕円形の大きな湖のような入り江で自然の良港になっている。西さんの話では、この港が鰹漁の基地になって栄えたと言う。確かにこの港ならばそれも可能な感じがする。そしてこの出羽島と一緒に牟岐も栄えて、一大漁業基地を形成したようだ。

私は出羽島の自然の良港を見て伊豆大島の波浮（はぶ）の港を思い出した。波浮の港も大きなカルデラ湖のような深い穴が港になっており、遠洋漁業の基地だった。

港を中心に古い街並みが続く。今は48人しか住んでいないというが家の数はそれよりもずっと多いから最盛期は1000人位住んでいたという西さんの話を実感する。廃校になった小学校があり、その大きさからすれば子供もたくさんいたのだろう。

島の南側は高台になっていて結構登る。コンクリート製の疑似丸太で階段が整備されており登り易い。延々と続く階段の整備にはかなり金がかかっているようだから、観光での島興しを考えているのだろう。



【出羽島の港】

宿に戻ると夕食の用意がされている。本格的なインド風のビーンズカレーとサラダとチャイの組み合わせで、なかなかいける。普通は離島に渡れば新鮮な魚料理と相場が決まっているが、そうではないところが面白い。

夕食の途中から西さんも加わって宴会が始まる。まずは旅の話だ。彼は私たちの2人の間柄に興味があったようで、いきさつを話し地球一周の船旅で知り合ったことを伝えると、とても羨ましがっている。

そして今回の旅では、しまなみ海道を歩いて渡る計画だと言うと、西さんは「私も、先日、自転車で渡ってきました」と言っている。外国人向けのPRビデオの案内人役として参加したというから、彼は英語も堪能らしい。私が「いよ、アクター」と言うと、彼は照れてはいるが、まんざらでもなさそうだ。

実は西さんはサーファーでこの島の波に魅了されて移住したという。家の中のあちこちにサーフィンの写真が飾ってあるが、それは彼のライディング姿だと聞いてヒデさんも私も驚きを隠せない。おそらくは世界中の海を巡ってこの島に落ち着いたらしい。そう考えると本格的なカレーとチャイの夕食にも納得する。

サーフィンのこと、島での暮らし方、島の将来、西さんの夢などについて夜遅くまで会話が續いたが、私は少し飲み過ぎて途中から覚えていない。



【民宿シャンティシャンティ】



【西さんのランディングの写真】

■徳島から今治へ

朝6時、日の出を見るために展望台に登る。港を中心にした街並みが広がる。港から昨日乗ってきた連絡船が出航しようとしている。

今日の船長は西さんだ。昨晚彼の暮らしを聞いたら、民宿を営むかたわら連絡船の船長代行、そして時々サーファーだと答えてくれた。

その彼が運転する連絡船に乗り、牟岐に戻る。

牟岐から1両編成の列車に乗り、徳島で降りる。駅ビルの中にある焼肉屋で昼から焼き肉とビールを頼む。それは全国旅行支援制度の恩恵でクーポン券が6000円分あるからなせることだ。

焼き肉は食べたが、別の冷麺やクッパは食わずに特急列車に乗り高松を目指す。高松で讃岐うどんを食べるためだ。

高松の駅近くの「めりけんや」で讃岐うどんを食す。私は蕎麦よりもうどんの方が好きで、それも讃岐うどんが大好きだ。

昔、「恐るべきさぬきうどん」という本を読んで、讃岐うどんにはまったことがある。その本は、ゲリラうどん通(つう) ごっこ軍団(通称: 麺通団)による讃岐うどん店の食べ歩きの本で、実に面白かった。麺通団の掟のようなポリシーが書かれており「決して蕎麦を馬鹿にしてはならない」という言葉が印象に残っている。

1990年代以降における「讃岐うどんブーム」の火付け役を果たした。



【「めりけんや」の讃岐うどん】

もちろん個人的な旅や出張で高松を訪れては讃岐うどんを相当の杯数を食べていた。

第二章 しまなみ海道

■しまなみ海道、初日

愛媛県の今治から広島県の尾道まで、いわゆる「しまなみ海道」を徒歩で渡ることが今回の旅の目的のひとつで、朝早く私とヒデさんは張り切ってホテルを出発する。私たちが泊まった今治の市街地のホテルから歩くことも考えたが、JRの駅が橋の近くにあるので、私たちは鉄道を1駅乗車して波止浜の駅から歩きはじめる。



【波止浜駅前にて】

今治を出て最初に渡るのは来島海峡大橋で、この橋は第一大橋、第二大橋、第三大橋に分かれており、この3つ合わせた長さは4.1kmにもなる。海面から橋までの高さが65mもあるのは、瀬戸内海を航行する大きな船が下をくぐるために高さが必要になる。

問題はその高さで、そこまで行く手段だ。しまなみ海道は高速道路以外に自転車兼歩行者用の道があり、歩行者だけなら階段にするという方法もあるが、自転車のためには緩やかなスロープが必要になり、私たち歩行者もそのスロープを歩かなければならない。



【来島海峡大橋の第三橋 左が自転車兼歩行者用道路で対面通行になっている】

私たちはまず第三大橋を渡り、馬島（うましま）を目指す。

景色は抜群で、青い海に大小様々な島並みが映える光景は、まさしく“しまなみ海道”たる由縁だろう。下を見ると青い海が広がっており、橋の下を航行する船が小さく見える。さすがにこの高さには足がすくんでしまう。

第三大橋を渡ったところで、何とトイレの標識がある。高さは65m以上あるはずなので、「こんなところでトイレとはどういうことなのか」と私とヒデさんは顔を見合わせる。まさか65mの橋の上から“立ちション”ではなかろうと言いながら、トイレの標識に沿って歩いて行くと、エレベーターがある。エレベーターには人間以外に自転車もオートバイも載せられるようになっている。そのエレベーターに乗り、65mを一気に降りる。エレベーターの出口は馬島の地面で、トイレがある。その周辺に何人かの作業員が集まって、これから始まる作業の準備をしている。

ヒデさんがその作業員中でも少し太った、人なつっこい感じのおじさんに「この島、人が住んでいるの？」と聞くと、「確か10人くらい住んでいるよ」と答えてくれる。昨日泊まった出羽島の48人にも驚いたが、この馬島の10人にはまた驚いてしまう。ただこちらは橋で繋がっているから出羽島とは大きく状況が異なる。しかしもしも、この橋を造らなかつたらどうなっていたのだろうか。

第二大橋、第一大橋と渡ると状況が徐々に分かってきた。

橋は基本的には高速道路なので、人や自転車はもちろん、125CC以下のオートバイも通行できない。そのために橋の両側に側道があり、片方は自転車と歩行者用で、もう片方は125CC以下のオートバイ用になっている。先ほどのトイレに行くエレベーターもオートバイが載せられるようになっていた理由が分かる。

来島海峡大橋を渡り、大島に入る。尾道までの距離は高速道路では残り50kmなのに自転車兼歩行者道では60km以上になっている。全ての橋には自転車兼歩道と125CC以下のオートバイの側道が付いているが、島内に入ると街の中や畑の農道を走るようにコースが設定されている。サイクリストに街並みや景勝地を見てもらうためなのだろう。

そのサイクリストたちに出会うと、私たちは「こんにちは」とか「がんばれよ」と声をかける。皆、元気にそれに応えてくれる。

サイクリストは外国人が多い、半分以上は外国人かもしれない。しまなみ海道は世界的に有名なサイクリングロードになっている。そういえば昨日の西さんが外国人向けのプロモーションビデオに出演していたことを思い出す。

外国人以外には日本人のカップルも多いが、女性1人というのも意外に多いのは、このサイクリングロードが極めて安全でインスタ映えするスポットが多い証拠かもしれない。

しまなみ海道、それも橋ではなく陸地の部分で集落の外れになるような地域を歩いていると気が付くことが2つある。

1つはソーラーパネルが非常に多いことで、至るところで目に留まる。瀬戸内海気候は雨が少ないから日照時間が多いことに起因しているのだろう。

もう1つは老人ホームが実にたくさんあるように感じる。これも気候が温暖で魚貝類が新鮮で旨いことから、年配者が暮らしやすいという理由かもしれない。そんなことをヒデさんと話ながら歩いていると、その情景にピッタリの場所が私たちの目の前に現れる。



【ソーラーパネル群のむこうに老人ホームが見える】

大島から伯方・大島大橋を渡り伯方島に入り、お好み焼き屋「風（ふう）」で昼食をとる。伯方島は愛媛県だが、すぐ隣は広島県になるから、お好み焼きは広島風のものになっている。だから店の名前が風（ふう）なのか。いや、それはないか。

この店は若い夫婦が営んでおり、奥さんの温かい対応と夫婦の息のあったやり取りが実に気持ち良い。

そして久しぶりに食べる広島風お好み焼きも旨い。ビールとの相性も抜群で、疲れた体の五臓六腑に染み込んでいく。

実は私の得意料理はお好み焼きで、私は 20 代の新婚時代に大阪に住んでいたのが大阪のお好み焼きが好きになり、以後 40 年間も家で焼き続けている。従って広島風ではないが、粉文化として相通じるものがある。



【風の広島風お好み焼きとビール】

大三島橋を渡り大三島に入る。右に海、左に畑、その向うに山という景色が延々と続き、おおよそ 1 時間歩いた頃に、多々羅大橋の手前の多々羅公園に到着する。

ここには「サイクリストの聖地」の記念碑がある。その前では多くのサイクリストたちが写真を撮っている。そこでタンデム自転車に乗る神戸からやってきたという中年カップルと出会う。タンデム自転車とは 2 人乗りの自転車で、前の人ハンドルを握り 2 人で漕ぐというもので、かつては多く見かけたが最近では珍しい。



【多々羅大橋とサイクリストの聖地の碑】



【タンデム自転車の 2 人】

多々羅公園に隣接する日帰り温泉施設のある「多々羅しまなみドーム」に行く。地元民の憩いの場所のようで多くの島民が来ている。温泉に浸かり、ヒデさんが地元のおじさんたちと話をしている。今治から歩いてきたと話していたようで、おじさんたちからは賞賛の声が聞こえる。やはりしまなみ海道はサイクリングで走るのが常識のようで、歩いて渡る人を見たことがないと言っているのが印象的だった。

今宵の宿「民宿なぎさ」にチェックインする。この日の歩数は 51466 歩になるから、おおよそ 35km 歩いたことになる。

海辺の民宿なので夕食は豪勢だ。定番の地魚の刺身にはじまり、蛤（はまぐり）鍋、あさりの釜めし、海老や野菜の天ぷらと続き、鯛の兜の煮付けも出てくる。愛媛は鯛が有名だからある程度予想はしていたが、予想を完全に超えている。私もヒデさんは感動し、鯛が大好きというヒデさんは骨以外全てを食べきった。いや多少の小骨も食べていたかもしれない。



【民宿なぎさの夕食 この後に天ぷらが出てきた】

■しまなみ海道、2日目

ここは愛媛県だが、30分も歩けば多々羅大橋を渡り広島県になる。すると昨日チェックイン時にもらった全国旅行支援のクーポン券は愛媛県内限定なので使えなくなる。そんな都合の良い理由を見つけて朝食の時にビールを注文する。朝ビールで気合いを入れ、出発する。

多々羅大橋を渡り、生口島に入る。結構な距離を歩いたが、次の因島に渡る橋はなかなか見えてこない。最初はただ遠いなと思って歩いていたが、地図を見直してその理由が分かった。それは多々羅大橋から生口島に入った時に犯したミスだ。その時に見た観光用地図は南北が扁平しており、島の南側ルートも北側もルートもどちらも距離に差があまりなかった。南側は何もないので北側を歩いたため、地図は正確なものを見ないといけない、

それでも北側には綺麗なビーチがあり、夏ならば賑わうのだが、今は誰もいない。私は昔聴いたフォークソング「誰もいない海」を思い出した。

生口島から因島に渡り、それなりの距離を歩き、本日の宿「ペンション白滝山荘」に到着する。宿に着いたところで歩数計は38572歩を示しているから、30km近く歩いたことになる。当初予定では21kmだったので、だいぶ遠回りしたようだ。

このペンションは、旅行前に地図を見ながら因島の宿を探していたら偶然見つけた宿で、調べたら凄いいペンションだと分かり、大いに期待して来た。

建物は1931年築、有名なアメリカ人建築家ヴォーリズの作品でアメリカのプロテスタント宣教師の館だった。つまり築91年という洋館で、お洒落な外観と落ち着きある館内になっている。



【白滝山荘の外観】

チェックインの手続きは、オーナーの娘さんが対応してくれる。そして彼女が館内を案内してくれる。

食堂には暖炉があり、その近くに古い写真が飾ってある。1948年当時のものというから第二次世界大戦後間もない頃の写真で、周りには何も無い。海が近くに迫っているから、だいぶ埋め立てられたらしい。そして何よりも感じることは、実に重厚なたたずまいをしている。

この洋館ができた頃は人々の集いの場だったが、戦争のため宣教師一家が去り、時を経るにつれ館は荒れていった。たぶんこの写真がその頃なのだろう。

そして1987年にペンション白滝山荘として再生し、現在のペンションのオーナーが引き継ぎ、家族で経営している。「広島県近代化遺産」、「文化庁登録有形文化財」の指定を受けている。



【1948年の写真】

食堂はお洒落な窓で明るい。私たちが泊まる部屋の入口は大きな木製のドア、真鍮のドアノブ、造りつけの家具などは当時のものがそのまま残してある。古いものだけではなく質感を残しながらも利便性を考慮して、上質のベッド、採光の良い窓はサッシになっており、エアコンも最新のものが使われている。



【食堂】



【私たちが泊まった部屋】

トイレもとても綺麗だ。もちろんウォシュレット付きでこれも最新のものになっている。そういえば昨日泊まった民宿もトイレは綺麗で最新設備だった。やはり気の効いた宿はトイレに気を使っている。風呂は外で温泉に入ることできるが、トイレはそうはいかない。

風呂は大人 2 人が脚を伸ばしてゆっくり浸かることができるサイズで、ステンレス製の湯船で循環式になっている。それゆえ 24 時間入浴可能だが、オーナー家族が 11 時以降入るので、できればその頃までに済ませて下さいと言われる。

私が「洗濯機はありますか？」と聞くと、彼女は「洗濯はこちらでやりますから出して下さい」と言ってカゴを渡される。私は驚き、そして少し躊躇しながらも「ありがとうございます」と言って、入浴後に洗濯物をカゴに入れて渡す。

食事は、和食の“おもてなし”で、少し創作も加わっている。料理を運んできた娘さんに「洋館なのに、どうして和食なの？」と質問すると、彼女は「父は若い時に和食の修行をしていました」と教えてくれる。

出された料理は、柿の白和え、ゆずみそ豆腐、刺身はカンパチと鯛とイカ、手作り茶碗蒸し、海老のカルパッチョ、ローストビーフとセイゴのフライという説明で、私は「セイゴ？」と聞き返すと、彼女は「出世魚のスズキの幼名です」と教えてくれる。質問しても魚の名前も答えられない宿のスタッフも多いが、家族だからなのか親がきちんと教えているだろう。



【夕食の一時】

食事が終わった時に、先ほどカゴに入れて渡した洗濯物が出来上がり、乾燥もさせて綺麗にたたんである。なんということだろうか。洗濯はともかくも乾燥させ、たたんでもらうとは予想を完全に超えている。従ってこれもまた感動だ。

洗濯物はパンツ、シャツ、靴下だが、恥ずかしながら私は自分の下着を洗濯してもらうのは母親そして妻以外では初めだ。

これがホスピタリティ精神なのかと感心してしまう。

■しまなみ海道、3日目

宿の風呂は24時間風呂なので翌朝も入り、純和食の朝食を食べて宿を出る。ここでまた奥さんに「因島から向島に渡る因島大橋のたもとまで車で送ってもらえませんか？」と無理なお願いをする。案の定「大丈夫ですよ」と返事をもらい、宿の主人の運転で送ってもらう。何しろここ2日間で結構な距離を歩いてきたので、ヒデさんの足は限界に近づいている。

しまなみ海道の最後の島になる向島に渡る。高速道路は向島のほぼ真ん中を貫いているが、高速道路なので徒歩や自転車は通れない。従って本日もまた島の北側の人家が多い街並みを歩く。

サイクリングを楽しんでいる中年カップルが写真を撮っていて、「撮りましょうか？」と声を掛けると何となく仲良くなる。この2人は神奈川県から来て尾道で自転車を借りて大三島で返し、そのあとは今治までバスに乗り、特急列車に乗って本日は松山の道後温泉に泊まると言っている。一言でサイクリストといっても、ここしまなみ海道では実に色々な楽しみ方があるものだと感心してしまう。

みかんの直売所がある。詰め放題で300円の看板が出ているが、そんなに買っても食べきれないので、ヒデさんが交渉して100円で分けてもらう。しかしそれでも食べきれない。直売所のベンチで食べるみかんの味は格別だ。

向島から対岸の尾道は直ぐ近くで、私たちは橋ではなく富浜から渡船に乗り尾道駅前に着く。時間はまだ11時前と早い。

ここまでの本日の歩数は16427歩で、約11km歩いたことになる。結局のところ、2日半をかけて今治から尾道までを106465歩で歩いた。距離にして約75kmになる。



【みかんの直売所で食べる】



【渡船の尾道の棧橋 駅前のビルが見える】

尾道と言えば尾道ラーメンが有名で、観光協会で有名店「丸ぼし」を教えてもらう。この店は行列ができるという人気店で、時間はまだ 11 時過ぎだが、既に何人かが並んでいる。待つこと 10 分、店内に入り尾道ラーメンを食べる。味はまあまあだが、私のイメージと少し異なっていた。

そのイメージの違いについて少し調べてみると、尾道ラーメンは 2 系統あることが判明する。

尾道ラーメンは 1947 年に台湾出身の朱阿俊が屋台で出した中華そばに始まり、その後「朱華園」の看板を掲げた。醤油味ベースのスープに平打ち麺、豚の背脂のミンチを乗せたもので、残念ながら店は 2019 年に閉店した。朱華園の味はそこで修行した福山市の中華そば「しんたく」に引き継がれた。



一方 1990 年代に福山市の「阿藻珍味 (あもちんみ)」がお土産用として尾道ラーメンを販売する。鶏ガラスープに平子いわしを使ったもので、以後はこの系統の店が増え、一般的に尾道ラーメンといった場合はこちらを指すことが多いという。

【丸ぼしの尾道ラーメン】

私が食べたのは背油が多かったので朱華園をルーツとするものだった。阿藻珍味をルーツとするものの方が今では一般的なので、イメージが違ったということになる。

予定の列車の出発まで時間があつたので駅前の飲み屋で昼飲みする。隣に座ったおばさん 3 人組と話す。他愛のない会話ではあつたが、内容は「旅は道ずれ世は情け」的なものだった。つまり同行者のいる旅が心強く感じられ、世を渡るときは情けを掛けあうことが大切との意味だ。ここまでの旅では随分とヒデさんに助けられた。

岡山駅で乗り換えて津山線に乗り、私たちの前に座った横浜から来た夫婦と話す。私がかぶっているボスニアヘルツェゴビナの帽子に興味をもっているようで、海外旅行談議に花が咲く。

中国山地のほぼ中央、岡山県第 3 の都市の津山に着き、最近何回か一緒に旅をしている旅友のキキちゃんが経営する「桔梗屋」で一杯やる。話題は DMV、出羽島、しまなみ海道と話は尽きない。

実は、私の旅行記を読んで話をしてみたいという地元の人もいて、旅の話で盛り上がる。

第三章 鳥取県

■若桜鉄道

今回の旅は鳩（にゅう）さん、キキちゃん、ミッチちゃんと私の4人が今年の春に草津温泉に行ったことから始まった。（旅行記「草津四万温泉の旅 2022」参照）

秋になったらどこか行こうかという話になり、津山で再会をして、この時季なので松葉ガニを食べに行くという4人の旅がベースになっている。しかし私は、単にそこへ行くだけでなく DMV やしまなみ海道の旅をその前に付けて、そこにヒデさんが乗った。

そして本日はその4人に加えて、鳩さんと私の友人のタケさんも参加し5人旅が始まる。

昨夜の酒も残りながらも津山発の6時47分列車に乗り、智頭（ちづ）で乗り換えて、郡家（ぐうけ）で降りる。郡家から若桜（わかさ）までの若桜鉄道に乗るためだ。

郡家駅には切符を売る窓口も券売機もなく、切符は駅構内の観光協会で売っている。とことん合理化している。観光協会で聞くと、若桜までの往復切符はないので一番お得なのはフリー切符だと言う。しかしシニア回数券というものがあり、5人で使えばフリー切符よりも安く往復できる。観光協会の人には販売業務だけを請け負っているのだから、あまり分かっていないようだ。合理化の弊害か、いや合理化というものはそういうものなのだろう。

阿佐海南鉄道の DMV に乗った時に「どこでもローカル鉄道」の人が、くま川鉄道以外にこの若桜鉄道を推していた。理由は列車も駅舎も綺麗だと言っていたが、確かにその通りだ。

車内に乗り込む。彼の言葉どおり、とても綺麗だ。木目調で温かみのある椅子はビロード生地のカッション、テーブルには突起があって手で握るにはちょうどいい大きさと形をしている。鳩さんは、これは立つ時に身体を支えるものだと言っている。ミッチちゃんは荷物を引っ掛けるフックだと言って自分のバッグを掛けて見せた。ちょっとしたアイデアだが、こんな突起でもあると便利で話題にもなる。



【若桜鉄道の車内】

列車が走ること約 30 分、終点の若桜駅に到着する。

駅舎も木目調で新しく、そして小綺麗になっている。待合室も車内と同じように木製の椅子テーブルで統一されて落ち着きがある。ライブリーという部屋が待合室の隣にあるが、本はあまり置いていない。

WAKASA CAFE という看板が出ているコーヒースタンドが切符売り場の直ぐ隣にあって、駅舎内にコーヒーの香りを漂わせている。ここでコーヒーを注文すると待合室やライブリーに淹れたてのコーヒーを出前してくれる。コーヒー好き、あるいは特にコーヒー好きでない人にも、この上ない時間と空間を提供している。



【若桜駅にて】



【コーヒースタンドの WAKASA CAFE】

若桜に行ったら昼食はここで食べたいという洒落た料理店「ふるーる」に入る。せっかく山奥に来たので、ここならではのジビエ料理で、鹿肉のフィレステーキ定食を注文する。

出てきた鹿肉は実に柔らかく、味付けもなかなかいい。鹿肉や熊肉などのジビエ料理は一般的には硬いイメージがあるが、そうではない。この柔らかさは何か特別な処理をしているのかと店の女将に聞くと、彼女は「単に焼いただけで、柔らかいのはフィレ肉を使っているからですよ」と言っている。私は「それなのに 700 円でいいのですか」と返すと、彼女は苦笑いをしてペコンと頭を下げた。



【ふるーるの鹿肉フィレステーキ定食】

若桜の街は古い街並みが残る城下町で、昔は山城の若桜鬼ヶ城があった。若桜駅付近の標高は約 200m で、若桜鬼ヶ城は標高約 450m の山の上にある。正確には山城の跡で、江戸時代初期の「一国一城令」によって廃城になるまで因幡地方の重要拠点だった。

パンフレットには城跡まで片道 45 分と書かれているが、観光案内所で聞くと私たちの顔を見て 1 時間位見ていた方がいいですよと言われる。

登り坂は結構急勾配できつい、それでも何とか登頂を果たす。頂上からの見晴らしは抜群で若桜鉄道も見える。

この城跡は六角石垣はじめとして廃城になったままの当時の石垣が残っているのが特徴だ。主要部の石垣には元和3年(1617年)の形跡が見られると、鳥取県の調査で全国的にも類を見ない遺構と判明し、国の史跡にも認定されている。

街からの高さは250mもあり、しかも急坂を登るので山城跡がそのまま手つかずで、残ったのだろう。



【鬼ヶ城の本丸跡】



【鬼ヶ城の六角石垣】

再び列車を乗り継ぎ津山に戻ると時刻は夕方6時に近い。丸1日かけて若桜まで往復したが、車で行けば約80kmなので1時間半で行ける。これでは鉄道離れは当たり前だろう。

■鳥取へ

本日からキキちゃんの友人のトシさんも加わり6人の旅になる。機動性を考えてレンタカーを借り、鳥取を目指す。

鳥取と言えば鳥取砂丘、最近はその砂丘の砂を使った「砂の美術館」が有名で、メンバー全員が初体験とのことで砂の美術館に立ち寄る。ちょうど今はエジプト展をやっており、スフィンクスやピラミッド、アブシンブル神殿などの歴史的建造物や古代のエジプト人の暮らしぶりを砂で再現している。日曜日ということもあって結構混んでいる。



【砂の美術館のエジプト展会場】

この博物館は2006年から毎年テーマを変えて実施しており、そのパネルも展示されているが、正直に言って砂でこれを再現してもイマイチというものがあった。しかし砂漠のエジプトには見事にマッチしたようで、砂像は実に見応えがある。

鳥取県岩美町の景勝地「浦富（うらどめ）海岸」の遊覧船乗り場にやって来る。

実はこの遊覧船乗り場の隣にお洒落なハンバーガーショップが最近開店した。私はそのアジフライ・バーガーに興味を持ち、是非食べたいという欲求でコースに加えた。

興味を持った理由は、トルコのイスタンブールのガラタ橋付近で売っているB級グルメ「サバ・サンド」の味が忘れられず、そのイメージをアジフライ・バーガーに重ねていた。

そのアジフライ・バーガーが出てきた。バンズの上に葉レタスと千切りキャベツ、その上に揚げたてのアジフライを乗せて中濃ソースとタルタルソースをかけてバンズで挟み込んでいる。2種類のソースが上手い具合に混ぜ合わさり、サクサク感もあってなかなか美味い。



【アジフライ・バーガー】

遊覧船に乗る。70人乗りの船は定員の半分も乗せないまま出航する。波はあるが晴天で、多少の揺れが心地よい。

ここ浦富海岸は“山陰の松島”と呼ばれる景勝地で、何となく松島に似ているが、ひとつひとつの島は柱状節理で松島とはその生い立ちが違う。松の木が島の上だけに生えていることが松島を引用する理由だろうが、日本海の荒波の洗礼のためだと船長が説明してくれる。

日本の景勝地で東洋のナイアガラとか、日本のマチュピチュとか、世界の名所の前に〇〇のといったキャッチコピーが多く使われる。分かり易い反面、がっかりすることも多い。出来れば山陰の松島ではなく、もっと独自性を強調する名前がいいかもしれない。

今回の旅では3回目の船になる、1回目は出羽島へわたる連絡船、2回目は向島から尾道に渡る渡船で、いずれも生活のための移動手段だったが、この遊覧船は明らかに観光目的の船で、生活感は全くしない。言わば景色を見せる船で、船内の船長の説明もそれなりに良い所を突いていた。



【浦富海岸を遊覧船から見る】

本日の夕食は松葉ガニ、もう少し腹をすかした方が良からうと近くの岩井温泉に立ち寄り湯をする。この温泉は“湯かむり温泉”の俗称がある。湯かむりとは、頭に手ぬぐいをのせ柄杓（ひしゃく）で湯をかむる（かぶる）というこの地方の風習からきていると看板に書かれている。湧出温度 49℃なので熱くて湯に入ることが大変なのでそうなったかもしれない。

■松葉ガニ

ズワイガニは北陸では越前ガニ、山陰では松葉ガニと呼ばれることは広く知られている。そして松葉ガニの水揚げ量が最も多いのは岩美町だということはあまり知られていない。その岩美町で豪快な松葉ガニ料理を出してくれる評判の宿が「民宿さんげんや」だ。

私は今回の旅のために色々と下調べをし、何度も電話をした。1軒の宿にこれほど手間をかけることは滅多にない。この宿は松葉ガニ専用宿、言わば穴場的な存在の宿で知る人ぞ知る宿になっている。

宿に着くと女将さんが迎えてくれる。何度も電話しているのでまるで常連さんのような対応で「お風呂にしますか？」と聞いてくるので、私は「今、岩井温泉に入ってきましたから、夕食でいいですよ」と答える。

夕食会場の部屋の襖を開けた途端に、私たち 6 人から「おおー」という驚きの雄叫びが発せられる。テーブルの上は松葉ガニのオンパレードになっている。とにかく“凄い”の一言に尽きる。皆は写真を真剣に取り始める。写真撮影が一段落した頃、隣の部屋からも「おおー」という叫び声が聞こえてきた。私たちより少し早く来たグループで、言葉からすると大阪から来たらしい。



【民宿さんげんやの夕食】

茹でたてでタグ付きのオスの松葉ガニとメスのセコガニの夫婦ガニを中心に、生の松葉ガニ（活ガニ）を岩塩で蒸し焼きにする焼きガニ、鍋はもちろんカニすき、日本海の地魚の刺身、イカの刺身と焼きイカ、エビの刺身、カレイの煮付け、自家製の茶碗蒸しなどがところ狭しと並んでいる。

女将さんは「食べきれない方はビニール袋がありますからお土産に持ち帰ってください、明日の朝まで当方の冷蔵庫で保管しますから名前を書いておいてください」と言い、マジックペンとビニール袋を置いていった。

女性陣は最初から完食を諦めて、茹でた松葉ガニ夫婦を土産で持ち帰る用意をしている。女将さんはこの夫婦ガニのセットでも駅などで買うと2万円近くすると言っている。

早速食べ始める。まずは、タグ付きの茹で松葉ガニを食べる。身がしまっており肉厚で美味い。誰かが女将さんに「カニ酢は無いですか？」と聞くと、「この地方ではそのまま食べますよ」とのことだ。その言葉に一同うなずき、そして黙々食べる。

活ガニを岩塩で蒸し焼きにする焼きガニを食べるためにコンロに火を点ける。頃合いを見て食べると、岩塩の塩味がかすかにカニに移っており、実に絶妙な味に仕上がっている。隣で食べているキキちゃんもこの岩塩の味付けに感心している。彼女は料理屋を営んでいる言わばプロだ。その彼女は地元が津山でここから近い。その彼女にしてこの味付け、食べ方は凄いと驚きの言葉を連発している。

その隣にいるミッチちゃんは、カニはもちろんのこと地魚の刺身とカレイの煮付けに舌鼓を打っている。

男性陣は松葉ガニ夫婦と格闘しており、バキバキという凄い音が聞こえてくる。さらに焼きガニや地魚の刺身なども同時に食べているが、なかなか減らない。完食は容易でなさそうだ。



【タグ付き松葉ガニとセコガニ】



【塩蒸カニ】

全員がひたすら1時間以上食べ続けているが、なかなか最後のカニすきにたどり着かない。せっかくここまで来たのでカニすきも食べなくてほと、コンロに火を点けて鍋に具材を入れる。もちろんその間もカニや他の料理と格闘が続く。そしてカニすきが出来上がり、食べ始めるも中の具はそうは減らない。野菜を中心に食べるので肝心のカニが残っている始末だ。

女将さんがやってきて、「雑炊にしましょうか？」と聞いてくる。一同は「もう、無理」とカニ雑炊は諦めることになる。

2 時間強のカニ軍団との格闘が終了する。皆の顔には達成感や安堵感、雑炊まで行かなかった無念感など複雑な顔が見られる。

御年 88 才の鳩さんに向かって、誰かが「冥土の土産になりましたね」と言うと、鳩さんは「冥土には雑炊も持って行きたい」と言っている。別の誰かが「もう一度ここに食べに来ないと冥土に行けませんね」言ってお開きになる。

部屋に戻ってしばらく食休みをして二次会が始まる。と言ってももうこれ以上食べられないので肴のない酒盛りだ。いや肴は夕食の松葉ガニとの格闘の話だけで充分で、これ以上の肴は要らないだろう。

■次の旅へ

翌朝は至って普通の朝食だ。できれば昨夜食べられなかったカニ雑炊を出してくれればという声も聞こえてくる。

朝食後早々に宿を出発して、津山に戻りレンタカーを返す。桔梗屋でキキちゃん手作りの津山の B 級グルメ「ホルモンうどん」をご馳走になり、旅の打ち上げをする。

キキちゃんの説明では、津山は古くから牛馬の流通拠点だったので食肉が豊富な地域だという。ホルモンうどんはその牛のホルモンをたっぷり使ったうどん、味噌や醤油ベースのタレを絡めてうどんと一緒に一気に焼き上げる。津山市内には 50 店舗以上のお店があり、どこも少しずつ味が異なると言っている。



【ホルモンうどん】

津山発の高速バスに乗って大阪駅に向かう。津山から大阪へはこのバスを使った方が早くて運賃も半額以下だとキキちゃんから聞いていたが、まさしくその通りで快適に大阪まで移動することができた。そのことは JR 西日本が一番よく知っているのも、高速バスは JR 西日本が運行している。

鉄道と高速道路とのコラボレーションや役割分担は意外なところでも始まっている。

大阪に行き、先日まで一緒に旅をしていたヒデさんや地球一周の船旅の仲間たちと再会して飲み会になる。2 軒ハシゴして私だけ近鉄大和八木駅に行き、ビジネスホテルに宿泊する。

第四章 大和から紀伊

■日本一長い路線バスの旅

9時15分、大和八木駅バスターミナル発の新宮行きバスに乗り、私1人のバス旅が始まる。

このバスは日本一長い路線バスとして距離169.9km、168のバス停、約6時間半で和歌山県の新宮駅まで、1日3便運行している。



【日本一長い路線バス 背面の地図が面白い】

バスに乗ると、いかにもバス旅が目当ての旅行者が10人くらい、あとは地元の人々らしい。満員でないが平日のローカルバスにしては、乗車率は高い。市街地を走っている間は、乗り降りするのは地元の人で、徐々に減っていくが常に10人以上乗っている。

終点まで乗ると5380円もするのだから黒字路線は間違いない。奈良交通はこの路線は廃止できないだろう。

10時を回った頃には車窓からの景色は山ばかりになっている。10時25分五條バスセンターに着いて10分間のトイレ休憩になる。この路線バスは6時間半ぶっ通しで乗車するので途中でトイレ休憩のため2時間に1回くらい、10分~20分間の停車がある。

運転手は時々観光ガイドをしてくれる、後醍醐天皇の関連の古民家の説明など興味深い内容だが、アナウンスがあった時には通過しており、タイミングは今一つかもしれない。それは運転が本業なのだから致し方ない。

山間部に入ると集落が続いている場所では 30 秒間隔くらいで停留所のアナウンスが流れるが、逆に人家のない場所では停留所がないので車内は静まり返っている。このオンとオフが面白い。素人の私が考えると停留所は一定間隔に配置したくなるが、その必要はなく、利用者つまり住民の暮らしを第一に考えれば当たり前のことだろう。

私が車窓を何気なく見ていると、168 と書かれている道路標識が目につく。最初は 168 停留所のことかと思ったが、実は国道番号の標識で、この道路は国道 168 号線だった。主に 168 号線を通るから、むしろ停留所の数を 168 に合わせたのかもしれない。

その国道 168 号線を外れることが時々ある。

昔は国道だったが新しくバイパスが出来て旧国道になった道、あるいは狭い道を抜けて集落に入ることもある。いずれにしても住民の利便性を考えてのことだろう。道は狭いので小型乗用車でも運転に気を使うが、そんなことはお構いなくバスはスイスイと走る。

十津川村に入る。奈良県で一番大きい村だと運転手はアナウンスしてくれる。

豪雨災害の爪痕が残っている。少し高い所に架かっていた橋が流され、トンネルにも土砂が入ったと言う。凄まじい光景をいくつも目にする。

12 時 7 分、上野地の停留所に停まる。停留場の近くに「谷瀬の吊り橋」という長さ 297.7m、川面からの高さ 54m という吊り橋がある。生活用道路としての人道吊り橋では日本一だと書かれている。実は、私は 30 年くらい前に家族と来たことがあり、確か吊り橋の下のキャンプ場でキャンプをした。



【谷瀬のつり橋】

停車時間が 20 分もあるので渡ってみようと気軽な気持ちで渡り始めるが、これが意外に怖い。私は自分のことを高所恐怖症だと思ったことはないが、明らかに足がすくんで恐がっている。こんなことになるとは予想もしていなかった。

しまなみ海道は海面から高いから付き合えないと言っていた高所恐怖症の友人のことを思い出す。今後は彼のことを笑えない。

停留所近くの食堂を兼ねた土産物屋で、面白いものを見つける。「めはりすし」という郷土料理で、簡単に言うと“高菜で巻いたおにぎり”になる。1 個 200 円と書いてある。昼を過ぎて小腹もすいてきたので 1 個買い、店の人に「これバスに持ち込み OK ですか？」と聞くと「路線バスだから問題ないよ」と慣れたものだ。バスの乗客の多くが買っているということだろう。



【めはりすし】

バスの中で食べると高菜の辛味が絶妙で旨い。もう 1 個買えばと少し後悔する。

■十津川温泉

最後の休憩所となる十津川温泉に 13 時 30 分に到着する。次のバスは 2 時間半後なので、私はここで降りて温泉に浸かり昼食を食べようと途中下車をする。しかし共同浴場が本日定休日と貼り紙が出ている。慌ててバスに戻って次の「ホテル昴」まで乗る。

ホテルは野外ステージもある立派な施設なので、日帰り入浴料も 1000 円と高い。

温泉は低張性中性泉、湧出温度 69℃、ほんのり硫黄臭漂う泉質も良いが、内湯と露天風呂の雰囲気は抜群に良い。内湯は木造り、露天風呂も石と木で造られており、大き過ぎず小さ過ぎずのちょうど良い広さをしている。何よりも人が少ないことがいい。

周りは山ばかりで、やや紅葉をしている。色付き加減は今一つだが、とにかく静かで、むしろ静まり返っているという表現が合っている。これほどの静寂に包まれている中での温泉入浴はあまり経験がない。さすがに熊野古道だ。

湯上がりにビールを飲みながらロビーに貼ってあるポスターを見ると、高野山から熊野本宮までの熊野参詣道を 5 日間かけて歩くというプランが目にとまる。これは面白そう、次の旅の企画が浮かんでくる。



【ポスターの高野山から熊野本宮までの行程（高低）の図】

実はこの旅に出る前に友人たちと一緒にフランス人を含めて都内を散策した。そのフランス人は日本が大好きで、特に日本古来の神道に興味を持っている。明治維新後に国策によってできた天皇家を頂点とする伊勢神宮の系統ではない昔ながらの日本の神社が好きだという。そこまでも神道について知っている日本人もあまりいないのに、私は驚いた。

その彼が、私との散策の後に熊野古道を旅すると言っていた事を思い出した。

■新宮

次のバスが来る。しかし誰も乗っていない。2時間半前に乗ってきたバスにはあんなに人が乗っていたのに信じられない。奈良交通が廃止をしないと行ったことは取り消さないといけない。

このバスに人が乗っていない理由は、大阪、名古屋あるいは東京まで本日中に戻るためには先ほどのバスに乗り続けるといけない。ちなみに本日の私は新宮に泊まる。

和歌山県に入る。道は大和路から紀州熊野路に変わり、その隣を流れる十津川は熊野川に名前が変わる。川幅も広くなり土地も平らで広がってきている。

外国人が2人乗ってきた。若い男性2人組で短パンにTシャツというスタイルだ。彼らは湯の峰温泉で降りる。山間部なのでもう暗くなっており、宿は見つかるのだろうか心配する。しかしこの外国人たちも、私と一緒に東京散策をしたフランス人のように熊野古道が好きでしっかり調べて来ているのに違いない。

新宮の市内に入り、辺りはもう真っ暗になっている。

速玉大社前という停留所がある。ここ新宮は「熊野速玉大社」という神社が有名で、実は新宮という地名は熊野の本宮に対して新しい宮、つまり熊野速玉神社を指して新宮として栄えたバスの中で説明がある。

18時30分、長い路線バスの旅は新宮駅で終着を迎える。

翌朝、今回の旅に出てから11日目の朝を迎える。新宮駅6時20分発の特急に乗り帰宅の途につく。切符は昨日、バスで新宮駅に着いた時に購入した。

実は新宮駅のみどりの窓口は閉鎖になっており、購入したのは「みどりの券売機プラス」というもので、私にとっては初体験になる。この機械は優れものでジパング倶楽部の面倒くさい購入手続きもできる。書類確認が必要なので、遠く離れた場所にいるオペレーターを呼び出してテレビ電話形式での対面販売になる。初体験なので多少手間取ったが、慣れてくれば問題ないだろう。

無人駅も増えており、主要駅とはいえみどりの窓口を維持するのは容易ではないから時代の流れかもしれない。しかしこのシステムは鉄道会社側だけでなく利用者にもメリットがある。昨夜は18時30分に駅に着いたが、券売機の対応時間は23時までとなっている。

当初、18時30分着でみどりの窓口が開いているか心配していたが、バスの中で調べて安心することが出来た。



【新幹線ホームのしきめん】

今回の旅の最後のグルメとして名古屋駅の新幹線ホームの「しきめん」を食べる。私は蕎麦よりもうどんが好きだと書いたが、私の出身の群馬県では「ひもかわ」と呼ばれる平べったいうどんが名物になっており、私もよく食べた思い出がある。

以前友人から、新幹線ホームの立ち食いしきめんがお勧めだと聞いたが、どうも私の勘違いだったかもしれない。

麺はいいが、汁は生醤油の味が少しきつかった。

それにしても新宮から名古屋まで特急列車で3時間以上かかった。昨日の路線バスでは長くねくねとした山道を6時間半かかった。やはり聖地の熊野・紀伊はそう簡単に人間を近づけてはくれない。

■新幹線にて

帰りの新幹線の中で車窓を見ながら鉄道についてつらつらと考える。

今回の旅でローカル鉄道に乗ってきたが、牟岐でバスを待っている時に話した地元の人の言葉が妙に気になっている。つまり、国道と並行して走るローカル線は不要だという言葉だ。

かつて鉄道は高速大量輸送の最たる手段だった。人力車や馬車しかない時代に鉄道が登場して、速く大量に人や荷物を運ぶ都市間交通の主役としてデビューした。しかし時代は変わった。現在は鉄道に代わってバスやトラックが登場して、高速道路網の整備により一晩で東京から遠隔地、例えば四国まで安く運んでくれる。

この時代の変化に対応しているとすれば、私が今乗っている新幹線だ。現代において人を運ぶ手段として高速大量輸送の主役は新幹線になっていると言っても過言ではない。

私は2018年に日本一周を主に新幹線で旅をした。(旅行記「日本一周鉄旅2018」参照)

その時に私が感じたことは、新幹線の速さだった。簡単に例えると、同じくらいの距離を移動するのにかかる時間は新幹線を1とすると、在来線特急がその3倍、在来線普通列車は6倍くらいになる。

理由は簡単で、新幹線の速度は時速300kmでほとんど直進する。在来線は特急列車でも最高時速130kmで山を回避し、街と街を結ぶので曲がりくねっている。普通列車に至っては長距離列車がほとんど無くなり乗り換えや交換待ちに更に時間がかかる。

既に大都市間の高速大量輸送の主役は新幹線になっており、ローカル線や特急列車の出る幕はない。鉄道が生き残るとすれば、都市圏内部の移動になり、それに特化した地下鉄や私鉄が主役になっている。その他には観光用ローカル鉄道という道があるくらいだろう。

牟岐線や津山線、因美線で乗った1両編成のワンマンカーの列車は、バスと一体何が違うのだろうか。ある種の安心感は別として、利便性はバスの方が高い気だろう。少なくとも運航コストは桁違いにバスの方が安い。

その理由は、バス会社は道路や信号機というインフラ整備に金がかからないからだ。それらのインフラ整備は国や地方自治体の仕事で、回りまわって税金から金が出てはいるが、バスの利用者は支払っていない。その感覚さえもない。

鉄道会社の場合はレールやトンネル、鉄橋というインフラは自前で整備しないとイケない。国や自治体から補助は出ているかもしれないが、この分は明らかに利用者負担になる。ここに鉄道とバスの決定的なコストの差が生まれる。

従って鉄道の生き残る道は大量輸送しかない。しかし人口減が続く過疎地域では難しい。

このコスト構造を理解していれば、ローカル鉄道の生き残る道があるかもしれない。あるいはDMVについてももっと活かせる方策があるかもしれない。

第五章 旅の記録

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。

評価は5段階でその基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

今回は温泉宿には泊まっていないが、特色ある宿について記録を残す意味で、私1人で評価してみた。あくまでも参考値で、特に総合点は単純平均値で大意はない。

出羽島の「シャンティシャンティ」は泉質-、風呂-、料理3、コスパ5、サービス5、建物・部屋2、立地環境4、総合点3.80になった。

大三島の「民宿なぎさ」は泉質-、風呂-、料理5、コスパ5、サービス4、建物・部屋3、立地環境3、総合点4.00になった。

因島の「ペンション白滝山荘」は泉質-、風呂4、料理4、コスパ4、サービス5、建物・部屋5、立地環境4、総合点4.33になった。

岩美町の「民宿さんげんや」は泉質-、風呂-、料理5、コスパ5、サービス4、建物・部屋3、立地環境4、総合点4.20になった。

■旅の記録

旅行は2022年11月13日(日)～11月23日(水)の10泊11日で実施した。行程を以下に記す。

- ・1日目 自宅を夕食後に出発、22時15分新宿バスタ発のマイ・フローラに乗車
- ・2日目 朝6時30分徳島県阿南市の阿南ホテルサンオーシャンのバス停で下車、ヒデさんと合流してJR阿南駅からJR牟岐駅まで列車移動、バスに乗り換え阿波海南駅まで行き、DMVに乗り「道の駅穴喰温泉リビエラ」まで行き、昼食「鯉酒盗井」を食べ、再度DMVに乗り「どこでもローカル鉄道」取材中の工藤さんと話し、阿波海南駅からJR牟岐駅行き乗車、牟岐駅近くの正観寺を参拝牟岐から連絡船で出羽島に渡り民宿「シャンティシャンティ」にチェックイン、出羽島を歩いて東回り半周して宿に戻る
- ・3日目 宿を出て7時25分発の連絡船で牟岐に戻り、牟岐から徳島行き、徳島駅ビル内の「肉酒場ブッチャー」で昼食、列車に乗り高松駅前お好み焼き屋「めりけんや」で讃岐うどんを食べ、再び列車で今治に行き、「ホテルクラウンヒルズ今治」にチェックイン、その後に宿の隣の居酒屋で夕食
- ・4日目 朝6時49分の列車で今治駅から波止浜駅に行き、しまなみ海道ウォーキング開始、来島海峡大橋を渡り大島へ、大島から伯方・大島大橋を渡り伯方島へ、伯方島のお好み焼き屋「風(ふう)」で昼食、大三島橋を渡り大三島の多々羅公園にある「サイクリストの聖地」記念碑を見物、多々羅しまなみドームの日帰り温泉に入浴、「民宿なぎさ」にチェックイン、この日の歩数 51466
- ・5日目 大三島から多々羅大橋を渡り生口島へ、瀬戸田の街を抜けてセブンイレブンで昼食、生口橋を渡り因島へ、ペンション白滝山荘にチェックイン、この日の歩数 38572
- ・6日目 因島大橋のたもとまで宿の主人に車で送ってもらい、因島大橋を渡り向島へ向島の国道377号線を歩き富浜港から渡船で尾道駅へ、尾道ラーメン「丸干し」で昼食、駅前の居酒屋「せと」に寄ってからJR津山線に乗り津山の「桔梗屋」へ、鳩さん、タケさん、キキちゃん、ミツちゃんと合流津山セントラルホテルタウンハウスに宿泊、この日の歩数は 16427 歩
- ・7日目 ヒデさんはここまでで離脱し、残りメンバーで新たな旅がはじまる津山発6時47分の因美線で郡家(こうげ)に出て若桜鉄道に乗り若桜駅へ、「キッチンふるーる」でジビエ料理の昼食、若桜鬼ヶ城跡に登り、同じルートで津山に戻り桔梗屋で宴会、ここでニシさんが合流、ホテルに連泊
- ・8日目 レンタカーを借り9時に津山出発、鳥取の「砂の美術館」、浦富(うらどめ)海岸で昼食にアジフライ・バーガーを食べて遊覧船に乗り、岩井温泉で立ち寄り湯17時「民宿さんげんや」に到着し、17時30分から夕食
- ・9日目 民宿を8時出発、津山でレンタカーを返却、メンバーは解散、私はキキちゃん手作りのホルモンうどんを桔梗屋にて昼食、そして1人になり12時30分津山発のバスで大阪駅へ、大阪駅付近でヒデさん、ヨコさん、姉さんと再会して飲み会、1人で近鉄大和八木駅に行き「ビジネス観光ホテル河合」宿泊
- ・10日目 大和八木駅バス亭9時15分発の新宮行きバスに乗り、上野地(谷瀬のつり橋)の

バス停で昼食「めはりすし」購入、十津川温泉の「ホテル昴」で立ち寄り湯
 18時30分新宮駅到着、「ビジネスホテル美郷」にチェックイン、
 近くのコンビニエンスストアで食料を買い込みホテルの部屋で夕食

- ・ 11日目 新宮駅発6時20分の特急列車に乗り、新幹線など乗り継ぎ、13時に帰宅

私が使った総費用は約13万8千円、内訳を以下に示す。

- ・ 交通費 51738円

新宿から阿南まで高速バスのマイ・フローラ	14900円
JR 阿南駅→JR 牟岐駅→(バス)→阿波海南駅	1340円
阿波海南駅から道の駅宍喰温泉リビエラ	往復 1400円
出羽島へ連絡船	往復 440円
JR 牟岐駅→JR 今治駅 (ジパング倶楽部3割引)	5870円
JR 今治駅→JR 波止浜駅	210円
富浜港→尾道	100円
JR 尾道駅→JR 郡家 (ジパング倶楽部3割引)	2610円
郡家から若桜鉄道の若桜 (シニア回数券利用)	3080円/5人
JR 郡家駅→JR 津山駅	1170円
レンタカー (旅行支援クーポン券 12000円使用)	4720円/6人
ガソリン代 走行距離 220km	2957円/6人
駐車場代 (砂の美術館)	500円/6人
浦富海岸遊覧船	1500円
津山駅から高速バスで大阪駅	2920円
JR 大阪駅→JR 鶴橋駅→近鉄大和八木駅	750円
近鉄大和八木→新宮駅	5350円
JR 新宮駅→横浜市内	11200円

- ・ 宿泊費 62768円

シャンティシャンティ (出羽島 旅行支援適用)	3300円
ホテルクラウンヒルズ今治 (旅行支援適用)	3414円
民宿なぎさ (大三島 旅行支援適用)	4620円
ペンション白滝山荘 (因島 ビール酒 旅行支援適用)	9700円
津山セントラルホテル (2泊 旅行支援適用)	7560円
民宿さんげんや (岩美町 ビール酒含む)	169048円/6人
(1人あたり1泊2食付き宿泊費 25000円+税金+飲み物代)	
ビジネス観光ホテル河合 (大和八木 旅行支援適用)	3000円
ビジネスホテル美郷 (新宮 旅行支援適用)	3000円

- ・ 食費・飲み代 20451円

ホテルリビエラ宍喰の昼食 (クーポン 500円充当)	3020円/2人
----------------------------	----------

牟岐町スーパーでビールやウイスキー	2460 円/2 人
徳島駅の焼肉「ブッチャー」(クーポン 6000 円充当)	970 円/2 人
高松の讃岐うどん「めりけんや」	260 円
今治駅前「千年の宴」(クーポン 6000 円充当)	217 円/2 人
伯方島お好み焼き「風」ビール含む	2594 円/2 人
民宿なぎさの食事のビール等(クーポン 6000 円充当)	0 円
生口島コンビニで昼食とビール	812 円/2 人
直売店のみかん	100 円/2 人
尾道ラーメン「丸干し」	730 円
尾道大衆食堂「せと」ビール酒つまみ	4350 円/2 人
桔梗屋 2 晩の宴会会費	6000 円
若桜「キッチンふるーる」ジビエ料理の昼食	700 円
浦富海岸港カフェ アジフライ・バーガー	650 円
大阪駅付近で飲み代(2 軒分)	4000 円
十津川村の「めはりすし」	200 円
新宮のコンビニで夕朝食と飲み物(クーポン 3000 円充当)	309 円
名古屋駅構内できしめん	340 円

・その他 3260 円

穴喰温泉リビエラ立ち寄り湯入浴料	800 円
多々羅しまなみドーム立ち寄り湯入浴料	340 円
砂の美術館入館料	800 円
岩井温泉共同浴場入浴料	320 円
ホテル昴立ち寄り湯	1000 円